

ヴォイス 5 ～森の声～

5号 vol.2-4 2008/12/15

中・高校生☆協同編集による
クリティカル・カルチャー・マガジン



特集 「表現祭は 続いている！」 2p

入江美穂 白石鹿乃子 中島大地 嶋本有里子 早川 誠

「行事での教員の関わり方」神座 想 11p

「ムギにきく」田上麦文 12p

【投稿】「クラスの存在」宮脇楓子 10p

【特別寄稿】「“自由の森学園の挑戦”のねらい」 25p



コラム⇒ 建築家 / 自森について / パシャリ / 自森坂 / 干し柿
人の光 / KYTE / 受験生

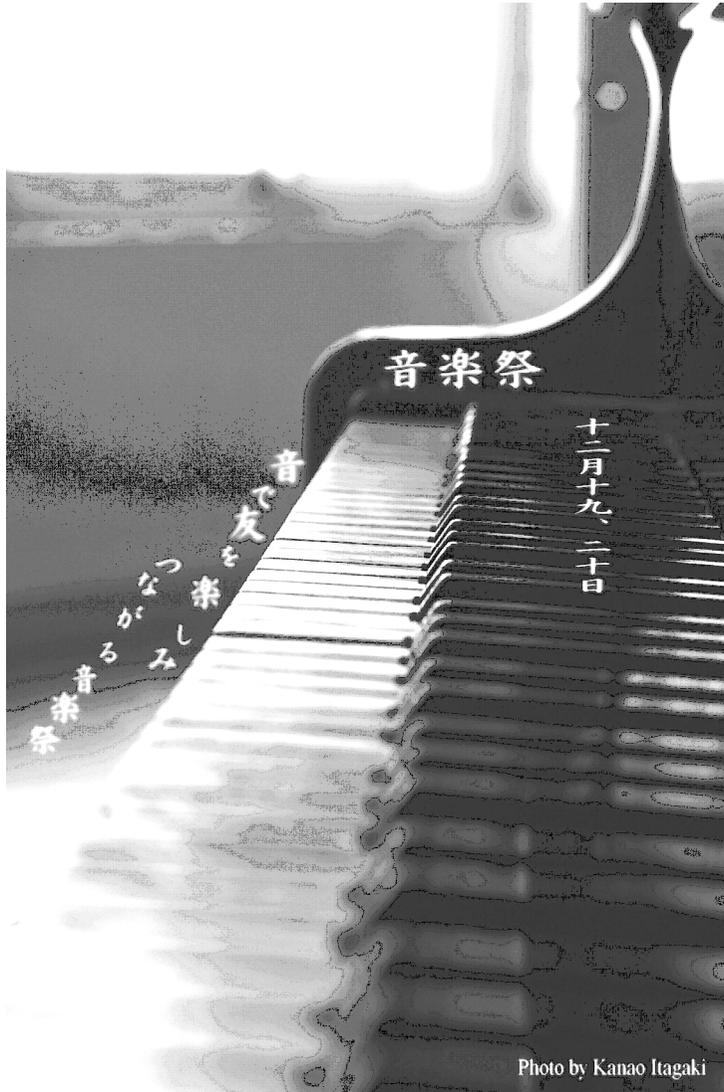


Photo by Kanao Itagaki

特集 ★ 表現祭は続いている！

自分の中では今も”表現”祭は続いているということ。
ただそれが”表現祭”にはなっていないんだと思う。言葉にするのがすごく
難しいからなんとも言えないんだけど…。

「表現祭」

時間が過ぎることによって”その時”の熱はどんどん失われていく。この文章を書いている今だって頭の中にあるのは、演劇の余韻と、音楽祭の事。

いきなり”表現祭”とは関係ないことを書いているのも、自分の中では思いつきになりつつある”表現祭”という記憶を引っ張り出せないでいるからだ。公開研のテーマ別で表現祭についての話し合いを立てた自分は今、表現祭の話し合いを立てないで音楽祭の係長をやっている。あのときのあの熱はなんだったのだろうか？時間は怖いものだと思った。今ではあの時の気持ちを思い出せない。

だけど1つ勝手なことを言ってしまうと、自分の中では今も”表現”祭は続いていると言うこと。ただそれが”表現祭”にはなっていないんだと思う。言葉にするのがすごく難しいからなんとも言えないんだけど…。

”表現”て言うのは、話し合いの中で発する言葉、写真を撮ることだったり、絵を描くことだったり、歌うことだったり、演劇することだったり。だから自分は今でも表現し続けていると思うし、表現する場があり続けていて欲しいと思う。

けど”表現祭”って言うのはそのやりたいこと、やりたい思いを共有して作っていかなければならない。それも全校生徒で。

つまり個人の表現をみんなに見せる。じゃなくて、個人の表現をみんなで作っていかなければならない。やりたいことをやりたい人がやる。それが一番いいんだろうけど、それだと”表現”に終わってしまう。

もともと”表現祭”には矛盾があったと思っている。全校行事にしたいのであればクラスを作るべきだったし、全校行事にしないのであればクラスの時間に立ち入ってはいけなかった。

こんなことを言っているといつまでも言葉だけが出てきてしまうから、交わさない(話し合わない)のであれば読んで人の不満を募るだけなのでやめときます。

だからやっぱり話し合うことは大切だと思う。自分の思いを自分だけで考えて答えを出して、人に押し付けることは出来るけど、そこで生まれるものがあるのだろうか。

今中心にある音楽祭だって考えてみれば”表現祭”であってそう考えると音楽祭を作ることだって”表現祭”につながってる。そしたらどんだけの可能性が”表現祭”にはあるんだ?って思えてくる。なんか壮大な話じゃないですか?笑 だからこの可能性をみんなで共有できたらもっと楽しいだろうし、多くの考えがあればあるほど広がっていく、そんなのじゃないかな。そうであってほしい。

最後に、今回の表現祭は良い面、悪い面どっちもが明確に現れていたと思う。良かったと思う人は良かったって言うし、嫌だったって思う人も嫌だと言える。それが出来たことだけでもう”表現祭”をやってよかったと言えると思う。今の自由の森を作ってく上で必要なこと。それがなんなのかは分からないけど、そんなものが少し見えたと思った。

入江 美穂(高2)

VOICE

私だけの表現祭

.....

表現祭・・・難しかったです。っていうイメージがあります。

私たち中学1年生は“う米”っていう企画をやりました。内容は、私たちは中1の授業の中でお米のことをたくさん知りました。そうして、この私たちが習ったこと（感動）とかを、もっと多くの人たちに知ってもらいたい！！って感じでこの企画が出されました。この“う米”は、中1のみんながやるってことが決まって、いろいろ問題が出てきました。その時、私は楽しくできなくなっていました。最悪だああああ～、どうすればいいのおお・・・って感じでいろいろ悩んでました。

その時、高3と中3の人がいろいろ励ましてくれました。すごくうれしかったです。「無理しなくていいよ～」とか「がんばりすぎだよ」って言ってくれました。

それまで私は人に、自分の弱みを出すのは嫌いでした。でも、人にいろいろ言ってみると、すごく自分の心が楽になることができました。そこで、自分の皮が一皮むけた！って思いました。それっていうのは、自分の同い年の人に言われても、多分感じ取れないと思います。そういう点で、高校生の熱い心が伝わったと私は思っています。そしてその時、一番印象に残ったのは、「一番がんばった人が、本番一番楽しめるんだよ」という言葉でした。その言葉を聞いて、“よっしゃやってみよう”って思いました。

それともう一つ、表現祭を通して友達が増えたことが一番うれしいです。表現祭・・・？？？って感じだったんで、一度実行委員会に行ってみるとすごくわかりやすく、表現祭って何をする行事ってことも知ることができました。行く数が増え、表現祭も増えていきました。そして徐々にちょっと難しい話もわかるようになりました。うれしかったです。私も、いろいろ実行委員長とも話ができるようになり、するとみんなからも声をかけてくれたりして、とても楽しかったです。

もうすぐ音楽祭です。音楽祭も積極的にやりたいと思います。

白石 鹿乃子（中1）

D

* ▽の中島大地(高1)の原稿は『ヴォイス 4』から再録したものです。これを読んでの意見を、嶋本 有里子(中3)と早川 誠(高3、表現祭実行委員長)にお願いしました。また、「投稿」として宮脇楓子(高1)の原稿が寄せられました。

with

大地の原稿に続いて、3本、掲載します。



自由の森学園の問題 表現祭の問題

1

今回の表現祭の最も大きな問題は、言葉と行動の不一致の激しさだったと思います。言っていることとやっていることが異なるならば言葉への信頼は崩れてしまい、話し合いが成り立ちません。

「評価表記入期間は、生徒が自己評価表に没頭する時間。生徒は他の一切の活動を停止すること」という決定がいつの間にか反故にされ、ねぶたなどの準備が次々と始まっていました。そもそもの年間日程組み換えの理由が最初からして無視されたわけです。

生徒側は約束を破るのではなくて、「評価表記入期間に表現祭の準備をしなければ間に合わない」ということをはっきりと認識し、教員とともに話しあっていくべきだったと僕は思います。そうでなければ、自由の森学園はやったもの勝ちの無法地帯になってしまいます。

2

口から発せられた言葉は流れていきます。だから口頭ではなくて、しっかりと事実を紙上に書き留めて全校に伝えるべきです。それがないと、あとから見返して全体を反省することも出来ません。

例えば、表現祭を2日間行うという決定はそれほど議論もされずにいつの間にか実行委員会で決定されました。そして朝のホームルームの時間で軽く伝えられただけでした。いったいどういう理由で、誰のために1日分の時間が追加された

のか。全く分かりません。ほとんどなし崩しです。

3

今年の表現祭は、これまでの学園祭（自由の森学園の行事）の良い部分・悪い部分を分別しきれずに全て呑み込んでしまったように見えます。そして、参加する生徒の減少（全体の生徒数の減少と、意欲と能力を兼ね備えた生徒数の減少）に対応するために、さらにいろんな部分を切り詰めざるを得なかった（ねぶたの縮小に象徴される）縮小版と言えるのではないかと。

4

なぜ有志は、自由の森学園という場を使って、自由の森学園のお金を使って、自由の森学園の教員の手を借りるのか。全部用意されているのに有志を名乗れるのか。甘やかされたお坊ちゃま・お嬢さま集団ではないのか。という言い過ぎかも知れないが、自分たちだけで何でもできるという過信は良くないと思います。

教員が年間日程を決めて、1年間の授業や行事の流れを作っているわけです。最初から、教員の掌で踊っているといってもあながちはずれてはいない。生徒の側が年間日程の案を考えて、教員の側の年間日程とつき合わせて話し合いを重ねていく、というところまでできて始めて、「自由の森学園は生徒が主体の学校」ということをまっ口に出して言っても恥ずかしくない状況になるかも知れない、という気がします。

5

「表現祭は新しい祭りだ」と実行委員会は力説しました。しかし実際のところ、昨年の有志学園祭の延長線上の祭りといっても良いような形でした。（クラス企画があることによる）安心感はあるにしても、新たな広がりを感じることは出来ませんでした。

「自由の森学園の全校生徒を巻き込み、楽しい祭りをつくる」という困難な課題に取り組んでみたり、地域（飯能）との連携をはかってみたりしてこそ、本当の「新たな祭り」への挑戦になったのではないかと。



今回の表現祭を経て、僕が思ったことの要点をまとめるとそんな感じになります。きつい表現が多いかも知れないなあ・・・ 傷ついたらごめんなさい（ではすまないかも知れないけど）まっ文句があったらどんどん反論して欲しいです。しっかりと受け止めてなんらかの形で答えたいと思います。

中島 大地（高1）

表現祭について - 私の経験から -

私が表現祭についての考えを述べる前に、私なりに表現祭を振り返ってみたいと思う。

表現祭実行委員会が大切にしたこと

「表現の質の高さを求める」

・メリット

企画をやる人同士、表現の質を高めていける

本当にやりたいことができる

・デメリット

生徒がみんな企画を立てて関わられるわけではないし、実際企画の数が少なかった

結局表現の質も中途半端になってしまったのではないかな

私が表現祭で大切にしたいと思っていたこと

「クラス企画の枠をつくる」

・メリット

関わられる生徒が増える

みんなが関わっていることで、学校自体の雰囲気良くなる

・デメリット

クラス企画に縛られてしまう

自分の本当にやりたいことができなくなる

表現祭実行委員会が大切にしていたことと、私が大切にしたいと思っていたことを比べてみて、私としては、「表現の質を高めること」よりも「みんなが関わって楽しめる」という行事をつくるのが優先されるべきだと思う。

しかもこんな短い期間で、「表現を極める」というのも無理な話だ。「みんなで一緒にやる」ということが自森らしくて一番いいことだと私は思う。

また、「表現」という言葉の意味を全校で共有できていなかったせいで企画が立てにくかったり、中途半端になってしまったりした。そういうこともあり、生徒が関わりにくかったのではないだろうか。

これを踏まえて、私が表現祭について考えていることを書きたい。

表現祭が立ち上がってからずっと思っていたことがある。「みんなでやらなくていいのだろうか？」ということだ。表現祭が動き出した時、私はただ、「みんなで行事をつくっていい

くことができたらいいな」とだけ考えていた。なぜなら、「全校行事」というものは、文字通り「全校の人たちでやること」だからだ。そしてそれをうまく実行するには、クラス企画はみんなが関わっていいものだ、と私は思う。

でも、「クラス企画」という枠がなくなり、企画がすべて「有志」になった。そのときに私は不安を覚えた。自分自身も行事に積極的に関わっていけるほうではないし、ましてやクラスで「やろうよ！」と声をかけないとやらない・関われない人たちはどうなるんだ！と思ったからである。しかし残念ながら、企画はすべて「有志」に決まってしまった。これでは「全校行事」というより、むしろ「有志行事」だ。一部の人が「最高の祭だった」と盛り上がっていても、自分から関わっていけない人は楽しむことができない。

「表現を極めよう」という気持ちもわかるけれど、そういうことを言う前に現実を考えてみるべきではないかと思う。みんなで楽しめてこそその全校行事ではないのだろうか？みんなで楽しむことができないのなら、有志の行事にしてもいいのではないかとさえ思う。

私は、「行事にはできるだけ多くの人に関わってほしい」という思いから、実際にクラス企画を立てた。しかし、それでもクラスの中では関わる人・関わらない人の温度差を感じた。それは、みんなが「みんなで一つのことをする」という楽しさを知らないからだ、と私は考えている。結局関わってくれた人は、クラスの中で半数にも満たなかった。

おとし、中学一年生のときに、私は初めての学園祭を経験した。そのときは、「クラスでひとつの企画をやる」ということはある程度「強制」だった。そうはいっても、「忙しい、忙しい」と言いながらやったその企画はすごく楽しかった。企画を通じて、クラスの中でいつもは話さないような人と話せたりするのも、「クラス」というまとまりで企画をやることの魅力だろう。「みんなで一つのことをやるということってこんなに楽しいんだなぁ」とそのときに感じ、そこから私はいろんなことに関わっていくことへの楽しさを知った。その楽しさを知ることができたのは、ある程度の企画への参加の「強制力」があったからだ。

企画がすべて有志になってしまうと、残念ながらやる気があり、積極性を持った人しか参加できない。いろんな人が関わる「全校行事」ならば、もう少し行事自体の問題を考えていくべきではないだろうか。私はそうすることによって、中学生も高校生も参加しやすいようになったらいい行事がつかれると思う。

そのためには、みんなに（特に中学生に）「みんなで一つのことをする楽しさ」を知ってもらうために、ある程度「強制力」のあるクラス企画も必要であると私は思う。積極的に物事に関われない人たちが、「クラス」という小さな規模の中で関わることを保障することが大事だろう。厳しい部分も至らない部分もあると思うけれど、これが私の考えていることです。

嶋本 有里子(中3)

行事をつくってほしい

行事を作るってむずかしい?いや、たしかにそうだけど、あなたには無理ってワケではない。

実行委員会でやっていることは、この祭りはどんな祭りにしたいかなあって言い合って、行事のイメージを固めること。そして、その祭りに必要な係を決めて、仕事分担をして、係会の活動に移る。

係会は割りふられた仕事をこなす。係長さんは一日の最後に集まって、本部の人と何の仕事をしたか伝え合って、新しく出てくる仕事を誰がやるか決めたり、他の係に仕事をお願いしたりする。

基本的にこんなことの繰り返し。

あとは有志を立てて行事に参加する人や、クラスで何するか話し合う人たちも行事を作る人たちだ。

つまり、ひとつの行事には、たくさんの作る人たちがいる。「私に行事は難しくてつくれない」というのは思いこみ。

行事はひとりじゃなくてみんなで作るもの。もちろん失敗だってするし、それに文句を言う人もいる。けれども、ここは学校だから、自分の出来る限りの努力をして、そこから何か学べれば、それだけでやり甲斐があるものだと思う。そんな経験の場のひとつとして行事ってすごい大事なものだって思う。だから俺はみんなにどんどん行事づくりに参加して欲しいと思う。

今は音楽祭が準備をしている。まずはその有志や係に参加するところからはじめてみて。

みんなで作ればこわくない。



本当は大地の文の返事を書けって言われたんだけど、すごいパーソナルな文になっちゃうし、VOICE 向けじゃないと思う。それにそんな文句の言い合いをここに載せたくなかったから、もっとたくさんの人向けに、行事を作って欲しいって気持ちをぶつけようと思って書きました。大地が何か俺に話があるなら、マンツーマンで話をしたいと思う。とりあえずそれまでは音楽祭を一生懸命つくろうかなと思う。)

早川 誠(高3)

[投稿] クラスの存在

そもそも、クラスと言うのは何の為にあるのだろうか?ただ何となく教員に振り分けられた他人の集まり。それは間違っていない。けれども、最近の自森は、クラスの必要性を考えている人が、少ない様な気がする。それは多分、行事にも普段の授業にも言える事だと思う。授業が難しいから、はたまた簡単すぎるからって、平気で授業をサボる。いくら自森が自由だとは言え、学校に変わりはない。自分に自信のない教科、自信のある教科にしか出ないなら、自森で勉強する必要はあるのだろうか?退学しろとか、そういう事を言いたい訳ではない。自森にいる理由は人それぞれだと思うから。だから、結構授業については、強くは言えない。自分の将来に関わるか関わらないかは、その人にしか分からない。授業は、他人が色々言えるものではなく、個人がどうするかで決まる。…はず。

それと最近、行事は“有志”の方が重要視されてしまっている。特に、表現祭。「クラスだと、自分の好きな事が出来ない。有志なら好きな事に専念出来る。」って言って、全体の流れを、有志にしてしまう。自分が満足ならそれでいい。そんな風に見える。自分が他学年の友達と店を出したり展示したり出来ればいい。…本当にそれでいいのかな?もちろん、有志が悪いと言いたい訳ではない。ただ、クラスが土台としてあって、その上に有志企画や部活企画が乗かって来るものなんだと思う。行事に関わりたいけれど、上手く行事に関われない人が関われる場所が、クラスだと思う。今年の表現祭に、痛い事を言ってしまうかもしれないけれど、私はあまり良くないと思う。(面と向かって言えないところがチキンですが…)周りをキチンと見ないといけない。クラスの必要性を強く感じた。クラス有志を出していないクラスは、実際、表現祭には全くと言っていい位、関わっていない。「みんなもっと盛り上がって!」と言われても、関わる企画がなければ盛り上がれる訳がない。とも思った。私自身、企画を持ったから、結構満足していたけれど、振り返って見ると、やっぱり全体が有志の流れだから、そっちの企画に専念している人が結構いた。自森は、生徒も教員も余程の事が無い限り責めたりしない。だから、自由と勝手に絡み合ってくちゃぐちゃになっている。意味は似ているけれど、全然違う。

あなたの思いは、クラスで共有出来てますか?自森を見に来ている他者に伝わっていますか?伝え合い、受け取り、そして共有し合えるのが、自森らしさな気がします。それは一部だけではなく全体と。もう一度考えてみてください。答えがないこの問いを。
クラスはあなたにとって、何の為にあるのかを。

宮脇 楓子 (高1)

J

with

* この原稿は、公開研テーマ別分科会「表現祭は終わらない」資料として神座 想が書いたものを改正して掲載したものです。

行事 表現祭 での教員の関わり方について

新しい行事が立ち上がり、表現祭となり、企画者会議が始まるまでの間に、教員（一部）がこの祭のベースをつくったと言える。実行委員会で教員はたくさん発言していた。それらの発言は何年も行事をやってきた経験に基づく、よく考えられた発言ばかりだった。だからこそ生徒は教員の意見に惹かれ、流され、いちいち何かを決定する前に、教員に「これでいいよね」といったように意見を求めたのだろう。

実行委員会の中で「教員に流されてない？」と言ったら、生徒に「流されてなんかない。教員も一緒に作っているんだから意見を言ってもいい。」と言われたことがある。もちろん対等に意見をぶつけあえるなら意見を言ってもいい。でも教員の意見は強い。聞けば「いいな。」と思ってしまう。そしてそれが決まってしまう。しかし、それでは生徒が作った行事とは言えない。つまり、表現祭は「教員に頼らないで自分たち 生徒たち で作ろう」と言っていたが、本当はベースの部分で教員に頼っていたと言えよう。

教員に頼るといって言えば、全校行事なのに中1はおいてけぼり 有志だからわざわざ中1と何かしたいという人は少なかった で、結局教員が支えていた。ねぶた、朝回りなど他にもいろいろある。行事において教員にどういう立場でいてもらうのか、生徒からはっきりと言わなければならない。私はもっと生徒同士で議論をすることを大切にするべきだと思う。それはとても時間がかかるし、効率も悪いし、間違いや失敗もするかもしれない。でもそれが大事なんだと思う。

私は、話し合いの中で教員が発言することによって、その教員の意見がある意味での正しさを 作り出し、生徒が無意識のうちにその意見からズレないようにしようとしてしまうことがあると思う。それはとても怖いことだ。正しいこと などないはずなのに、みんなが場の 空気を読み、人と違う意見を出さなくなる。もちろんそれは教員の発言のせいだけではない。しかし、私は教員の発言が、生徒がKYで無くなることへの一つのひきがねになると考えている。話し合いでは、多くの異なった意見がでて、ぶつかり合いがたくさんうまれるべきだ。教員の多すぎる発言はそのぶつかり合いを減らしていると私は思う。

神座 想 (高3)

～ムギにきく～

ムギ 田上 麦文 = 表現祭担当教員、美術科
じんざ ; 神座 想 = 高3、表現祭実行委員

神座 想の「行事(表現祭)での教員の関わり方について」をあらかじめムギに読んでもらい、インタビューが始まりました。

ムギ 率直に言うと、俺は、行事の実行委員になったときは、できるだけ、ポイントポイントで発言していきたい。教員があまり発言するべきじゃないというのはその通りだけどそこは判断が迫られるところ。俺は行事を25回ずつくらい見てきて「こんな行事ならもうやめたら？」と思うときと「ごめんなさい参りました、生徒たちは凄い」と思うとき両方ある。俺はいつでも、ぎゃふんといわせて欲しい。実行委員会に関わったとき生徒が中途半端な気持ちならそれを指摘するのが基本的なスタンス。

じんざ おれは今年の音楽祭が良かったのは、生徒同士が真剣に話したからだと思っている。教員が生徒の話し合いに口をはさんで「これはこうじゃない？」と提案することは、生徒同士の議論をストップさせ、それでみんなの思考を止めてしまうのではないか、と思うんだけど、それはどう思う？

ムギ 生徒の議論を妨げるつもりはない。議論がぐちゃぐちゃしたときの舵取りをしたい。受け入れられるときもあれば、流されるときもある。俺は実行委員会に参加しているときには教員集団の代表として発言するつもりはない。同じ表現者の1人としての発言。教員と生徒は対等だと思う。担当教員としての立場もあるけどそういう役割以前に個人と個人の勝負だからね。議論は。

じんざ 3年・6年いるだけの生徒より、20数年いる教員の方が絶対に全体を見通せた“良い意見”をだせると思う。その両者が対等に意見を出し合うというのは、対等ではないと思う。教員は経験に基いた考えをもつから発言力・説得力が強くなる。教員の正しい言葉によって生徒が意見をだすことに萎縮してしまって、生徒同士のぶつかり合いが減ったと思うんだけど、ムギはどう思う？

ムギ 僕はまったくそういうふうには思わない。教員の正しさと生徒の正しさがぶつかったとき、生徒のほうが正しいときもある。年齢いっているから教員のほうが言葉は得意だけど、得意さ・不得意さの違い。教員と生徒が対等でないなら、自由の森学園が崩れる。俺はいつでも直球で、自分の意見を投げる。その結果、間違っていたと思うことはたくさんあるし、俺の意見が受け入れられるときもたくさんある。自分と全然違う思考回路を持っている人の発言には感心させられる。それを受け止める周

困の生徒達も凄いと思う。俺が生徒を包み込んでいるとか俺の掌で生徒が踊っているという感覚はない。

じんざ 言葉を選べる教員が、言う言葉にはやっぱりある種の“正しさ”みたいなものが自然と宿ってしまうと思う。教員の言葉が正しいのでは、と生徒が無意識に思うことで自分で何かを考えることができなくなってしまうのではないか。生徒同士で意見を出し合うのと、生徒・教員が意見を出し合うのは少し違うこと。教員の言葉は最後で良いと思う、生徒のぶつかり合い、対立がある議論がもっとも大切じゃないか。

ムギ その言葉は俺に言うのではなくて周りの生徒に言ったら？ みんなちゃんと考えてみようぜ、といふうに呼びかけてみたらどう？ 教員に喋るなという要求はおかしい。

じんざ ムギは、実行委員会に参加したときは、教員としてではなくて、1人の生徒に近い心境でいくらでも発言して良いと思っているわけだよね。

ムギ 極端な言い方をすればそうなる。同じ行事をつくるものとして。極端に言えば、だけどね。

じんざ 問題なのは、教員の発言の多さではなくて発言の強さなんだよね。例えば、表現祭のことを例に挙げるとムギにはしっかりとした構想があった。最初に「表現祭」という名前を提案したのだから生徒ではなくて教員のムギ。それがいつの間にか生徒の提案で「表現祭」という名前にしました、となっていた。教員が道筋をたて、生徒は時間をかけてそれをたどっているようにおれには思える。

ムギ それは表現祭の実行委員長に失礼だと思うよ。実行委員長は俺に正解を伺いにきていないよ。表現祭の実行委員長は、俺とか教員のことを意識してないと思うよ。独自に進んだんだよ。

じんざ だから無意識のうちにそうになっているんだって。表現祭の実行委員会は、教員を意識していなくても、結局実行委員会が毎回終わるごとに「こういう方針ですんで良いですか」って教員に確認してさ。最終的に、全体の構想は教員に握られていた。

ムギ それは日程についての相談だと思う。表現祭のイメージを直接押し付けたりはしていない。

じんざ 直接命令したとかではなくて感覚なんだよね。教員がベースをつくりあげた、という。

ムギ 俺は俺の思い通りになったとはまったく思っていない。

じんざ そうだよ。ムギの思い通りにはならなかったと思うよ。だけど全体の方向

性が教員に握られていたな、とおれは思う。

ムギ 以前、学園祭を変えることを色んな生徒と話した。俺は金券をなくしたかった。みんなが金儲けを目指していたのがいやだった。もう1つ、「クラスが当然」というのがいやだった。クラスというけど、あれはクラス企画じゃない。教員がクラスを仕切って、企画をつくっていた。実行委員会と係会に人が少ないのもどうなのかと思った。あと学習発表会の展示・発表のなかで授業以外のものがはぶかれようとしたが、それならばそれを学園祭にうつせば良いんじゃないか、と思った。そういうことを、これまでいろんな生徒と話してきた。たぶん、今年の表現祭実行委員長たちにも話したんじゃないかな。

じんざ 今年の表現祭実行委員会の中心メンバーの人たちって、表現祭実行委員会の立ち上がるずっと前に、美術科研究室に集まってムギのはなしを聞いていたよね。それで、ムギのはなしを聞いてみんな凄い影響を受けたように見えた。

ムギ 訂正する。その人たちはこういう祭りにしたい、と提案しにきた。

じんざ 結局、表現祭実行委員会の中心メンバーの人たちって最初はみんな違う思いを持っていたのに、ムギのはなしを聞いたとたん意見が変わってさ。おれは怖いな、と思った。そもそも中心メンバーの人たちに、表現祭のベースの考え方を与えたのは、ムギでしょ。ムギは実行委員会が始まる前に、教員が生徒に強いインパクトを与えて良いと思っている？

ムギ 影響を受けあって当然。俺は影響を与えたいし、俺も影響を受けた。俺は行事の中で教員が手伝いすぎなのは改めたいと思っていた。それで今年は、教員が関わらない行事にしようという流れになった。良かったと思う。今年、会場係の担当だったけど係長に「ヘルプのときは呼んで」と言っただけで係会自体にはほとんど行かなかったよ。そういうのが、生徒の自主性を大切にして、生徒に自分で物事を考えさせることにつながると思う。

じんざ 自由と自立を育てるということが自由の森学園の根本にあるけど、そのためには教員があと少し口をつぐんだ方が良いと思うけど。

ムギ 俺がこうしたいという部分もあるし、俺の姿勢が生徒に影響を与えている。いつでも「自分達で考えろ」というのではだめ。俺の考え方をいうことが、生徒の動くきっかけになると思う。

じんざ 高3でも、自分の意見を持つというのは大変なことだと思うんだよ。ムギは感情をあらわにするし、ストレートに意見を言うじゃん。小学生ほどではないけど、それでも高校生だって子どもだから純粋で、褒められたら嬉しいし、「それは違う」と

言われたら戸惑ってその言葉に納得してしまうかも知れない。ムギは、生徒達はオレのストレートな言葉を跳ね返してくれるって言うけど、本当にそうか？

ムギ 難しいところだね。俺が生徒をけしかけている部分もあるかも知れない。ここまで言って良いのか、ぎりぎりのところ。ちょっと待て、という部分もあるだろうけど、そうじゃないとことが起きない。事件が起きない。「こんなもん」に収まっていく。

じんざ それはよく分かるよ。けど、「お前間違っているよ」って言うのではなく、「それって本当に良いの？」って聞くことで生徒にいろいろ考えてもらうのが大切じゃないの？

ムギ 「お前はどうかの？」というスタンスでいたい。俺はあえてこういう立場。一辺倒すぎる立場といわれるとそうかも知れない。俺という人間の資質の問題。俺はこういうやり方を選んだ。

じんざ 自由の森学園の生徒は、最終的には教員とか関係なく、「おれはこれがやりたい！」というふうにクリエイティブに何かを作り出していくことができると思っている。今は、それが足りないんじゃないか、と思っているんだけど、ムギはどう思う？

ムギ 今もしっかりある。それが、自由の森学園のもっとも大きな特質。

2008年 11月 12日 神座想と中島大地がムギに取材

11月 21日 中島大地、録音機をもとに原稿を起こす

12月 2日 ムギに原稿に目を通してもらい、確認

♪ インタビューを終えて

ムギは誰に対してもまっすぐで、熱して、いつも自分の気持ちに正直。みんなはこの文を読んで何を感じ、何を思いますか。もしムギに何か思うことがあれば、ムギにいてみると思います。そしたらムギは必ず本気で答えてくれる。ムギ、ありがとう。（神座 想、高3）

感想

教員がどこまで「指導力」を発揮して良いのか。生徒による「主体的」な祭は今の自由の森学園に存在しているのか。とても難しいテーマだけど、考えてその上で少しずつ話していくことが必要なのではないかと感じます。その一環として、今回の対談はとても実りあるものでした。腹を割って色んなことを話してくれたムギと神座想到感謝です。（中島大地、高1）

～ COLUMN COLUMN ～～～

建築家 安藤忠雄 の本

今ぼくは『建築家 安藤忠雄』という本を読んでいます。この本は凄く厚い本でまだ読み終わってないけど…っていうかまだ60ページしか読んでなくて、まったくそのあとの展開がわからないけど、読んでいる途中の部分までの感想を聞いてください。

この本は、この本を書いた安藤忠雄の思う建築家、建築家への出会いを文にして書いた本だと思います。そもそも安藤忠雄って誰？って思う人が多数いると思うので、すこし説明します。兵庫県で生まれて、独学で建築を学び、後に安藤忠雄建築研究所を建設。

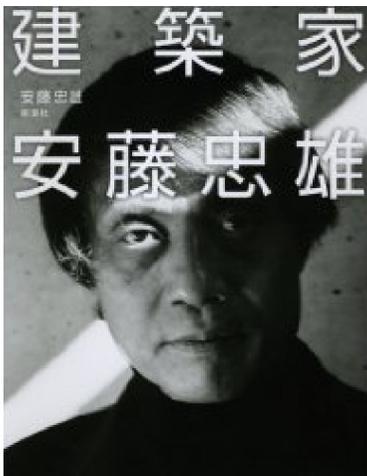
建設してから17年後大学客員教授になる。たしか…3回大学客員教授になっていて、イェール大学と、コロンビア大学、ハーヴァード大学に客員教授になった。さらに7年後は東京大学の教授になった人です。

ぼくは、独学で建築を学べる人って最初から建築家になりたいって思う夢があったのかなあって思っていたけど、この本を読んで、安藤忠雄さんは17歳の時、プロボクサーのライセンスを取得して、プロボクサーの道へ行っていた安藤忠雄さん…ぼくは驚いた。そして、二年後プロボクサーの成績が悪くなってどんなに努力しても強くなれないという現実を知ってプロボクサーをやめた。その後…幼

い頃から続けてきた物づくりへの興味が湧いて、独学で建築を学んだ。最初は建築じゃなくプロボクサーから建築へ道が変わった。「すげえ!!!」ってぼくは思った。

人生は何度も変わっていくんだなあ…ってこの本を読んでそう感じました。

ぼくもいつか建築家になりたい。



押立 敏樹(中3)

自森について、私が感じる問題

私は、授業を聞いたりするときは、多分まじめに聞くほうだ。だから、授業のときに静かにしない人の気持ちをよくわかっていないかもしれないけれど、ちょっと聞いてほしい。

最近、人が話しているときに、まじめに話を聞かない人が目立ってきたと私は感じている。例えば授業中にしゃべっていたり、お菓子を食べていたり、ボールで遊んでいたり……。そういう人がうるさくするせいで、話を聞きたい人が聞き逃してしまったりすることを私は頻繁に見かける。

社会には、必ずある程度のマナーがあるはずだと思う。それが自森だからマナーを無視して行動してもいい、なんてことがあったらおかしい。「人の話を聞く」ということは、社会で当たり前になされているマナーで、人の話を聞かないというのは失礼にあたると私は思う。なぜ、そんな当たり前のことが自森では自分から進んでできないのだろうか？（授業中にうるさくなるのは、生徒だけの問題ではないと思うときもあるけれど）

きっと、自森ではない所では、ちゃんと話を聞くはずだ。そうしないと怒られるし、変な目で見られるのかもしれない……。しかし、自森ではきつく怒られたりしない。だからみんなやるのだろうか。私はそんなことおかしい、と思う。「怒られないからやっていい」のだろうか？それは「ここは自森だから大丈夫だ」という甘えではないのだろうか？

私はけっして、教員に「話を聞かない生徒がいたら怒れ」と言っているわけではない。どうして自森では、自分から進んで話を聞くことができないのか、と言っているだけである。

授業中にうるさかったりすると、教員の言っていることや、クラスの人の中から出た意見が聞こえなかったり、私自身が集中できなったりする。

私は自森の授業が好きだ。授業で学びたい、という気持ちが強い。自森の授業を楽しみにしているのは、私だけではないだろう。

自森には、「授業をしっかりと聞いて、思う存分学べる」という自由はないのだろうか。私は、そんな自由が、「授業中にしゃべる、お菓子を食べる」といった不正な自由に侵されていると思う。

厳しい見方かもしれないけれど、私はこのようなことに問題意識を持っている。これについて意見がある人は、私にどんどん言ってください。

嶋本 有里子(中3)

パシャリといきましょう。

誰でも写真の1枚や2枚は撮った事があると思う

写真が好きな人 別に好きじゃない人
どっちでもいいんだけど、自分は写真が好きだから、やっぱりもっとたくさんの人に写真を好きになってほしい。



すごいベタな事言うと、同じ被写体を撮ってもその人なりの感性や切り取り方があって同じ写真は撮れないから、そういう面でも写真は面白いって思える。個性というかなんとか... うまく言えないけど;

今まで自分は何千枚と写真を撮ってきて、振り返って見てみるとほんとにくだらなくて馬鹿みたいな写真もあるし、すごく綺麗な写真もあったりして、その写真を見てると今と昔で撮るものが変わってきて、自分の中で何か変わってるっていうか、心の変化みたいなのを感じたりするし、なにより面白い、自分の事なのに。

自分は写真撮ってる時っていつもとはちょっと違う視点でものを見れて、普段の生活の中では感じない刺激を受けて、色んな事発見出来てたりする。



んー;何を伝えたいのかわかんないんだけど

どんなカメラでもいいから、何を撮ってもいいからとりあえず一枚パシャリと撮ってみよう って事です。

佐々木 優太 (高1)

自森坂をのぼるときづくこと

朝、バスから降りて自森坂の車道をのぼっていくと地面に盛り上がりがあって転びそうになります。危なくて、青空を見上げながら歩くことができません。

自森坂を猛スピードでくだる教員の車や生徒の自転車を減速させるために設けられた障害物らしい。できた当時はいろんな人が「邪魔だ」と言っていたけど、時が経つうちに慣れてしまったのか、もう文句は聞こえません。最初にちゃんと話し合えば良いだけのことではなかったのか。

不思議なことに教室にもものを置いておくと、ギターだろうとケータイだろうとなんだろうと、なくなってしまう。それで良いのだろうか。

小さなところに問題は潜んでいます。「自由」について、自分に引き寄せて考えてみたらどうなるか。自由の森学園は自由なのかという問いは、漠然としていて答えようがありません。あそこは自由、ここは自由じゃない、でもそこは自由というふうにいるいろいろ考えることは可能だけど、「じゃ全体としてみると自由か、不自由か」と考えてみてもあまり意味がないです。それを承知の上で書くのだけど、自由の森学園の生徒に自由はない、と僕は感じます。

大きな枠としては「年間日程」があります。

小さな枠としては「終バスの時間」があります。帰りのバスの最終の時間は6時5分と決まっています。誰もがそれを学校生活の前提として受け入れています（文句をつぶやく人もいるし、終バス後まで残る方法もなくはないけど）。むかし自森生は終電まで残って行事の準備をしていたといいます。そういう「伝説」のような時代に戻ることは不可能だろうけど、あと少し自分たちの生活を自分達で決めることを目指すべきじゃないか。

その他にもいろんな枠があります。



1日1日の生活が、自分自身の「習慣」や誰かのつくった「決まり」によってつくられた枠によって拘束されています。いろんな枠を、もう1度自分達で設定し直していく作業をすることで初めて自由がつかれる気がします。呑気に「自由」を謳歌しているだけでは、決して自由にはなれないのではないか。

中島 大地（高1）

干し柿

小さい頃は好きじゃなかったのに最近はずごくおいしいと感じるようになったものがある。まずはレバー、もつ、秋刀魚の内臓とか肝臓系。それにコーヒー。いかの刺身、なめこ、ゴーヤーなどなど。干し柿もそう。

私の家では、庭にある柿の木の実で毎年干し柿をつくっている。「あんぼ柿」という種類の柿の木で普通よりも大きな実がなる。それで干し柿をつくと実が大きいのでゼリーのように半生でやわらかい干し柿ができる。小さい頃はぐにゃぐにゃ感が全然好きじゃなかった。で最近はとろとろしてておいしい♪と思うようになったし、普通の干し柿もすごく好き。

私の家ではお正月前になると宮崎県に住んでいる祖父母から手作りの干し柿が届く。いっしょに、巨大な椎茸と獅子肉、それにおばあちゃんの手作りこんにゃく、餅なども入っていて毎年楽しみにしていた。

だけど今年はおじいちゃんが干し柿用の柿を採ろうとしてこけ、腰を痛め入院してしまうという事故がおきてしまった。なので今年はいつものように干し柿が送られてこない。毎年当たり前のように届けられていたものが・・・元気になっているけど、体のほうが言う事をきかなくなってきた。もうおじいちゃんも若くないんだなとさみしくなってしまった。わかってはいたけどいろいろなことがずっと今までと同じという訳にはいかない。それはさみしいし、不安な事。けど変わっていくことはとても楽しみでもある。周りが、自分が・・・もう高3になるんだなー。

家の柿は今年12個収穫できた。11月のはじめに干し柿づくりをしたけど、あまり乾燥していないので何個か腐ってしまった。他のも危うい感じ、うまくできるといいな。

小金沢 基（高2）



人の光

つい最近、電車で帰路についていた途中。ぼーっと外の景色を見ていた。外の景色といっても夜な上、八高線なので何も見えやしないのだが、ふと、遠くにみえる夜景が目に入った。その瞬間になぜか寂しい気持ちになった。

自然の中にある光。太陽や月の光、星の光や蛍とか虫の発する光。いわゆる、自然光。そういった光を見たとき当然「綺麗」とか「温かい」と感じる。だけど、人の作り出した光、つまり夜景を見たとき、僕は「寂しい」と感じた。それは『疎外感』というわけではない『寂しさ』。何かが恋しくなる『寂しさ』。昼間、蛍光灯の光なんか見ても何も感じない。でも、いったん夜が来ると蛍光灯や白熱灯の明かりの集まりがとても綺麗に見える。暖かい光を感じる。太陽のように本当に暖かいわけでも命が輝いているわけでもなく、ただ、電気が流れて中のものが光っているだけの機械。それでもなんで暖かく感じたんだろう。と、遠くの夜景をみながら考えた。僕が出した結論は、その光が同じ人間の作った光だからなのだろう。と、いうこと。実際、今生きているなかで一番目に入ってくる光は町の明かり。町の明かりはそこに人がいる証拠のようなもの。ひとりでその光を遠くからみていたから『疎外感ではない寂しさ』を感じたのだろう。

と、勝手にまとめてみる。さて、もうそろそろ駅に着くなあ・・・

板垣 奏男(高2)



KYTE～かいと

なぜ音楽が心にしみるのか。それは、ここには書きません。と、いうのは間違いで、うまく書けません。

うまく書けなくとも、音楽の良い所は確実な事と思っています。みなさんは、どう思いますか？

つい最近に知った音楽の事を書きます。

いきなり個人的なことですが、ふだん、だいたいにおいて、パンクロックしか聞いていませんでした。ある日、友達から沢山CDを借りました。その中のひとつに、「KYTE」がいたのです。パンクロックにはない衝撃が、そこにはありました。こんなにも一つひとつの音がはっきりとした、単純なようで複雑なような音楽を、はじめて聞いた、と思いました。こんな大袈裟に書いたら、これを読んでから「KYTE」を聞いて、がっかりされたら… 「KYTE」については、これ以上かきません。

だけど、この音楽の良さを、誰かに知ってほしい。人間ひとりひとり、音楽のツボは違うだろうから、難しい事かもしれないけれど。きっと似た人がいると思うから、その人に伝えるためにも、と、少し思っ書きました。



この文章の最初の方に書いた 音楽の良い所は確実な事 というのは、なぜだか分からなくても、外国の言葉が分からなくても、確実に心にしみるなにかがある。ということです。

あたりまえなことだけれど、それが不思議でなりません。

深沢 周 (高3)

受験生

おれが受けたのは教育系の大学で、将来教員になりたい人がたくさんいました。そこでおきたこと、考えたことを少しだけ書きます。

11時に筆記試験が終わり、受験生（おれを含めて24人）は控え室に案内されて、試験官に優しく言われました。「これから12時40分（面接試験開始20分前）まで外へ行っても、ご飯を食べてもいいですよ。自由にしてください。」おれはすぐに外にでました。迷子にならないように気をつけながらさんぽをしていると、校舎ぞいに、芝生で、色づいたはっばがたくさんおちてて、たいようの光があったかい、めっちゃきもちのいい場所を見つけて、そこでおにぎりを食べ、ねっころがりながら、面接でなにをしゃべろうか考えていました。目を覚ましたとき、よし、やる気を見せよう、と思い、集合の20分前に控え室に戻ることにしました。いい気持ちのまま校舎の中に入り、控え室のドアを開けると、バツ！！とその部屋にいたほかの受験生がいっせいにおれを見ました。23人全員きちんと席に座り、辞書を開いたり、願書を見直したり、ノートに文字を書いたり、はたまた「面接試験対策マニュアル」とか表紙に書かれている薄いパンフみたいのを読んでいる人もいました。度肝をぬかれたおれの体はドアのところで一瞬固まり、その後言葉にできない思いとともに、みんなの合間をぬって、空いている席に座りました。

いろんなことがありました。大学へ行くとき受験生だと思って高校生の集団についていったら、そのまま早稲田実業高校の中に入りそうになったり、試験会場で鉛筆を取り出そうとしたら、鞆のなかにビンが入っていてあせったり、控え室で面接の順番が来るまで待っている時、またひざしが気持ちよくて、うとうととしていて、頭がカクッってなって、ハッと顔をあげるとほかの人たちがみんなおれを見ていたり。でもそんななかで一番深く思ったこと。それは、おれはほかの人と戦っているベースが違うんだ、ということ。

グループ面接で一緒だった人など何人かと話をしました。みんなやさしくて、いい人たちでした。それなのにことあるごとに、どうしたらポイントが高い、こうしたら受かりやすいって先生が言っていた、と言い、また、模試やテストで点数が取れない自分を「ダメ」だといい、おれの模試の点数を知りたがる。ほかの受験生との（一貫しては言えないが）持っている“学力”の違いを感じました。そして、なによりもこの人たちのせいではないのだけれど、自分のことも他人のことも点数で評価するこの人たちが、これから教員になり、子どもたちの前に立つのかと思うと悔しかったです。

おれはその大学に落ちてもどうにでも生きていけると思っています。でもこの人たちはその大学に落ちたら、すべり止めの大学に行くのか、それとも。正直この時はこの人たちがこれから生きていけるのかを心配しました。でも、大学に落ちた方がいいのかもしれないとも今は思います。こんなのおれが自分にうぬぼれているだけで、そんな心配いらないよ。と、あなたは言うかもしれないけれど。

“自由の森学園の挑戦”のねらい!!

この秋、校舎のあちこちに貼られていた「自由の森学園の挑戦」というポスターを覚えていますか。

学校説明会には違いないのですが、東京都の中心部（JR 山の手線の内側）で初めて開催したということだけでなく、自由の森学園の理念とその実際の姿を、3回に分けて語るというもので、他校には絶対にできないものとなりました。



■ “自由の森学園の挑戦”、このタイトルの意図するもの

単なる学校説明会では面白くないなあ。他校とは違う学校説明会にしよう。そもそも自由の森学園は、深く考えることを大切に、生徒一人ひとりの個性を尊重するところだから、“点数という物差し”で生徒を評価する学校とは違うのだ。

それならば、自由の森の学びの姿を伝えることは、すなわち現代社会への挑戦なのだ。なんか格好いいねえ。親たちは生徒たちよりもノリがいいんだなあ。

そんな冗談交じりの話し合いの中で作成された保護者Sさんのポスターには「挑戦」というタイトルが輝いていた。

■ “学”・“食”・“生”というテーマはどこから生まれたか

ラッキーにも、5月に東京・新宿区内のYMCA施設を3日間も確保できました。これは保護者Mさんの尽力とYMCAのご厚意によるものです。

さっそく鬼沢さんに、これをうまく生かせないものかと親たち3人で相談に行きました。腕を組み、う~んと考えた鬼沢さんがこれはどうでしょう！と、思いつかれたのがこのテーマでした。

学ぶ

1985年の創立以来この学校が追究してきた“点数で生徒を評価しないという教育”がどのように進められているのかを語り、その具体的な姿であり実践である授業を参加者に体験してもらった（担当は鬼沢校長と後藤幹さん）。

食べる

昨今、食育という言葉をよく耳にしますが、自由の森の食堂は創設以

来「食べるということは命を紡ぐこと」という考え方で、学園の根幹を支えてきました。自由の森の食堂は「日本一の学生食堂」と評したヤマケンさん（卒業生の山本謙治さん）が「日本の食は安すぎる」をテーマに講演。次、食堂のこれまでの歩みと実際の姿を、泥谷さんたち食生活部の方々が語り、参加者には食堂の味を試食してもらった（担当は食生活部）。

生きる “生きていくって、どういうこと？” “自由の森での学びはどうなんだ” など在校生と卒業生による学外初のトークライブだった。学・食と2回の教職員による企画をうけて、彼らが自由の森をどう捉えているのか。その生の声を聞いてもらった。これこそ自由の森でなければできなかったことではないか。これに中国舞踊部のミニ公演が花を添えた。生徒がすべて担当。

■ 生徒・教職員・保護者のコラボ企画を実現

生徒と保護者の関係は親子だから難しい。「親の顔なんかあ！」というときもあるでしょうが、この講演会では3者が手を結びました。

自由の森は生徒と教職員と父母で創られている学校だから、困ったときはみんなで考え悩み、解決に向け努力していくものだと思います。

そこがこの学校に通う親たちの楽しみなのです。生徒たちと一緒に講演会を取り組めるだけで十分楽しいのです。許されよ。子どもたち！



(Sさんのイラスト、生徒手作りのチラシ)

■ 来年へと広がる・つながる人の輪

この講演会の準備過程で、自由の森の外に、それも都内に点線のようなつながりを創ることができました。一つ紹介しますと、保護者Tさんの紹介で講演会の協力をお願いに訪問した学習塾「エルムアカデミー」(品川区)では、驚いたことに2人の卒業生が講師として働いていました。その一人が3回目の講演会に登場して下さったYさんでした。

第3回目の講演会(トークライブ)が終わって、彼らが言ったことは「来年もやるぞ」でした。このとき生徒も教職員も保護者も皆同じ仲間に見えた瞬間でした。

最後にポスター貼りやチラシ配布、道案内等々手伝って下さった皆さんの輪の力のお陰でこの講演会は来年も続きます。ご協力ありがとうございました。

どうして「ヴォイス」を発行するのか

このごろ、自由の森学園が、たくさんの「観客」と、一部の「舞台に立つ人」に二分されている気がします。これはあまり、いいことではないと思います。いろいろな人の声表に出てこない、自由の森学園全体がだんだんと同じ色に染まっていってしまっ、て、「多様性」や、「個性」といったものが見えなくなってしまいます。

そこで、批評紙・意見紙として『ヴォイス』を作ることにしました。

まず、ある物事をとらえるとき、生徒の視点を大切にします。大人の理屈や視点も、もちろんあるかと思いますが、まずは自分達自身のベースに戻って考えていこう、というわけです。どんなに立派な事を書こうと、まだ半人前、できないこともあります。でももしかしたら、まったく新しい視点が、ポツと生まれてくるかも知れません。そういったことを意識していけたらいいな、と思います。

それともう一つ、自由の森学園はあとの人たちに受け継ぐことがあまり上手ではない、と私たちは感じています。1回1回、いいものが出来ても、そこで終わってしまう、途切れてしまっています。しっかりと積み重ねて、つなげることで見えてくるものがあるはずなのに、それではもったいない。

『ヴォイス』とは言葉どおり、声のことです。鋭い指摘を取り上げ、小さなつぶやきも拾い上げ、その「器」として、声の発信源となっていきたいなあ、と思います。

編集 一同

次号は2009年1月29日の発行予定です。
自由の森学園を広めることにどう生徒が関わっていくのか。
YMCA講座でも問題になったことを考えていきたいです。

Special thanks to all the

Guests



ヴォイス編集部

〒357-8550 埼玉県飯能市小岩井 613 自由の森学園図書館 出版相談室(大江)

Fax 042-972-6661 e-mail jb0@jyuncorac.jp

編集; 押立敏樹・嶋本有里子(中3) 佐々木優太・中島大地(高1) 板垣奏男・小金沢 基(高2)

神座 想・深沢 周(高3) (表紙; 佐々木優太)